和朝

今昔物語

巻十三

怪異

今昔物語 倭部 十三目録

○怪異傳

一 三條街洞院鬼殿霊語
二 桃園霊語
三 冷泉院東洞院僧都殿霊語
四 東三條銅精成人形語
五 在原業平中將妾為鬼被噉語
六 辨某為鬼被噉語
七 源公忠蹴盗油化物語
八 伴大納言善雄為疫神語

九曜文庫

九 粥茶薹院被取餌袋菓子語
十 近江國安義橋敵人鬼の語
十一 東國人値鬼語
十二 産婦行南山科値鬼逃語
十三 平季武値姑獲鳥語
十四 正親太夫為鬼被殺妻語
十五 狗為夫女の語

今昔物語 侯部 十三

○怪異傳

一 三條街洞院鬼殿霊語

今いまむかし三條より北洞院より東の門に鬼殿
ありけり 拾芥抄曰三條南西洞院東有佐宅悪所 其家に霊あり人を
ふるまぐ事有る都移して住むに夜ごとに
大きなる松の木あり其の色と男の胡簶負
色々なる。紙を雷電霹靂雨つゝ降れば
わづ紙色々なる馬より下りて松の木に居
々々ゆ雷おちうつて人馬ともに蹴殺しうつ

り男やどで霊になりぬべかりけるを。
其の人の家より遠く住まらんずる。霊出で来ぬべかりけるを。
して。そのじくよりかくざる事どもありとなん。
はべりけるとぞ。

二 桃園霊語

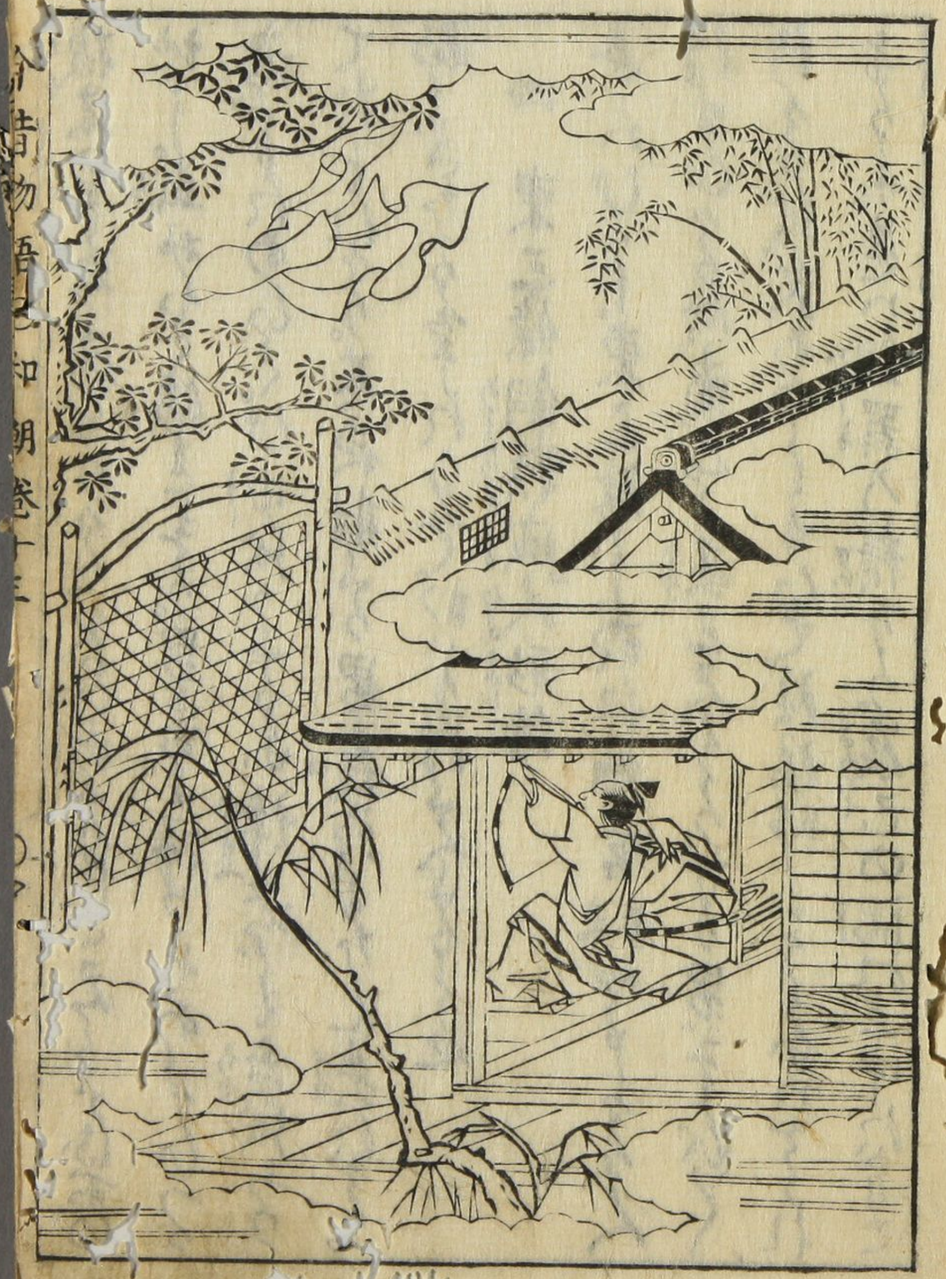
今は昔。桃園とは今の世尊寺也。拾芥抄曰一條北大宮西本小路東無路南伊尹摂政家本主貞純親王又曰桃園○同世尊寺南保光卿家行成卿傳之如此説以桃園寺為世尊寺歟

りしは寺もなくて。西宮左大臣住まひ給ひしに。寝殿
の辰巳の母屋柱より木の穴あり。穴より蛇出でて。人をまどはす。大臣

こしを頭のしぬばかりさわぐ。穴の上に住ゆる付
けまどもなし。紙まきそしぬべき。仏とおもはんずるやまだ。
ある間。ある人。紙をこの穴の口にしぬべき
の中をうがちぬ。事なりぬべきを柄
をぬきて。楔を穴にうちいれぬべかりけるを。
事絶えにけり。

三 冷泉院東洞院僧都殿霊語

今は昔。冷泉院より東の洞院より東の隅
を。僧都殿といひてありけり。法華院より出でた大
弁宰相源扶義 敦實孫雅信子右中弁正四位下 の家なり。扶義の



鼻い強弦の弓を張り是蒲 是忠孫清原男従四位下 ちかり。技義の家乃
名ありり。是蒲の家よりとたんしが。向の備前殿の成実の
ちかよりよりとたんしが。榎木のもとのよりの弦般の
弟より。赤き単衣を着りて。榎木のもとのよりの
讃岐守の家よ宿直しける男。単れ着りをきて。
射ばとさんとしひろふ。をきしをさく者ども。射あてじ
かとあるとふ。ひ者いうれども射んとついて。夕暮方に
備前殿りて。南面乃貫子に上りて待ける。東乃
方の竹ばしりたる。赤き単衣着くゆさりける。男
居候とりて射ける。単衣きる中と貫れたり。

腹ばかりなるものの、ちりぬるものの、もののわたりしこんでくるほどの地ちり。血ばかりながれきたり。男家より帰りてもわるそひつるおうなにわかくぴけ内侍ちりぬるふ。弾者ども舌ぬけうてわたそしくり。其後射ちる男寝ねたりよりたん失にくるぬ。ぬぐたる事にたりみそ。かくりはてくるもの也

四　東三條銅精成人形語

今いしり。東三條に修ちり。或郎卿宮未考ゆりくる人住まひしくる所。南ゆよ長三尺ばかりなる男ぞ出でくり行くる紙ぞ。ゆかりこのひそ陰陽師ようかいをしあるりみ。見い銅器の精なり。辰巳の隅の土中に有と

ゆけまべ。其所ぬ紙三尺人除ありせらしくるふ。ゆ手入れ乃銅の提とちり出をりぞのちいうの男れゆく事絶てしくり。物の精いかく人よゆく現ばくるもあるとなりぞりはくえてくるわなり

五　在原業平中将妻為鬼被咋語

今いしり。右近中将在原業平といふ人ありぞんしさ世の色好にて。世よありるばの女ぞくらくりけかきくる紙ばゆるばくりる人をもぞ人ゆしりあるもぞんのことめくちくうず紙はくてくしてきりぞるふあるくりしとりぞくるる世よばくしぞいたく

しかるに紙ばかりて能借しけるもの、ぬんでとり
らん婿取とさんといひくに、親どもゆるさずとも我れ
業平いろのてうけるまん。ひそかふ彼女紙ねとり
出てぱきゆくべき方をもとめ、ゆこ科の色に古
きこ山荘のやまてく人もとぼざうもうづ基の家乃内よ
大きなるあせ倉あり。四つ方に紙をくゆをもうに。
是一枚を敷くぴ女をはきゆきて外ろ。ちろ石
てぷくろん雷電霹靂してわたろしけきびぱ中将
女紙ろうろけろんわしゆりてたち紙接てひろ色
ろうぬ。雷も鳴とぐはり。ぬもあきらぬ。ぬ女

をせざりけきびぱ中ねあゆくそうろ月ろよ。女ぐろびと
衣類ぐろ敷ろ。中将あゆくわたろくて。着和と
をろうあへどふげきてろうぷそれより後ぴ倉ろ人取
とろ倉ろは紙ゆろの雷電霹靂い倉よ住もろ
鬼のもけうろやくぷろはそろろ

六　弁某為鬼被噉語

今昔。宮の司よ朝廳といふもろ紙わろぷいまぐ暁ろ
史紙ろぐてぞ人いまろけろ。ろのろ紀弁某い早くもろ
ろうぬ。史乃某いはそくもろ。宮乃門の屋は絆
ろ上弁の雑色小舎人者ぞ居ろ紙月ろ。弁い

早くとゝ秋さるゝ。実て遅まゝ事とぞ。れたる
ぐゝ。東廉乃戸のりて寄て。廉の内紙のぞけば。史を
消くゝ人れ乱色もあり。史あ中くゝ。て。弁れ雑色
どもの仲よりて。弁殿いいだくれ。ゆくゝ。ゆもとぞと
問ば。東廉ゆ。ゆくゝ着ゆ。ゆくゝ。ゆ。史ゆ。飯寮の
下部とよび。史をとゞさせ。廉れ内よ入くゝれば。弁れ在
み。血よ。ゆくれ頸。血付ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。其
扇。弁れ。ゆ。弁の法師と書付。ゆ。ゆ。ゆ。血
血ゆ。ゆくゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

是より後東廳にて朝廷をおこなはれ西廳にてぞ
おこなひあるはいまの水尾天皇の御ときなり
はじめなりけり

七　源公忠蹴盗油化物語

今はむかし。延喜御代（醍醐天皇）に。仁壽殿の臺代の御
燈油を。毎夜何物とはしらず。取りて南殿の
去りぬ。天皇日々嘆くおぼしめしてぬすみ人を
あらはさんと仰せらるゝ。弁源公忠（因紀子従四位下近江守右大辨号滋野
をいつ人殿上人にて内をうかがひ御油取物とゝろみる
事いなるものゝ。足わらはとゝは。取りて

作人とゝに。天皇よりこだにまいてゝ。わらべ足あらへ
をもて作る。時は三月下旬。霖雨よりて南殿の廻
はいとゝ。きに公忠弁。ひそかに中格より。按足
をのびりて。南殿の北の。腸戸より許よりて。数人を
きびしてうかゝひ。世の魁ぐりあちりて物の足音
して来れども。體いとてゝ。彼化物御燈油をとりて
うちゝ。弁足をあぶりてけて蹴ちられば。油
を拾ひ南のうへにぬぎ去りぬ。弁殿上にて火紙
とぐりて。足をふるふ血つきぬ。夜あをて蹴る
ぬるはさてこれば。藾枋色なる血ぬぐひ

其血南殿乃濃紫乃方あひさて あまてい濃紫といふ
さうろふ血のこありて他乃物いたりうろうちめくち
洗燈油取事。そうくたなるもきう。天皇いみ〳〵く。
公忠弁と感じまひうろうぱと弁ハ兵乃家よりあるれだ。
むかしこく思ふあうて。物わすれをねんとそうん皆
あるかぱうりはうえうるめをうり

八 伴大納言善雄乃疫神語

今いむ〳〵泉院洗宮。天下に嗟病をありて人多
く病死するたあうのころあるん変時ぐるまれて
路ととゆうろうるふ。赤表乃衣紙着。冠しるひこの。

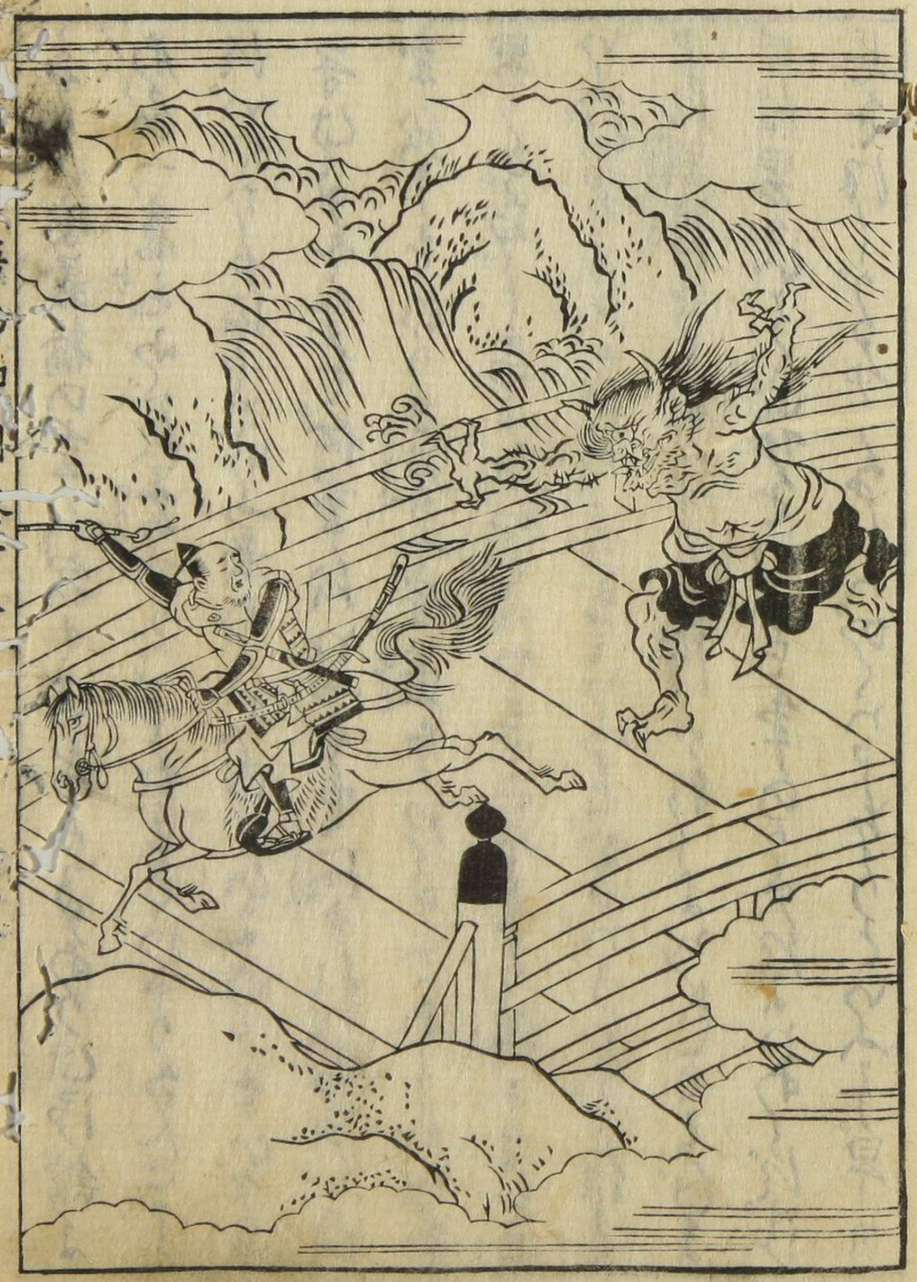
わそうしげなるふゆさあひうり。彼化物。我をぐぱとあうり
中と問うぱ男幼さてまうぐぱと答れぐぱ。ぱとい是ハ閻
魔ありう。大納言伴善雄江談抄曰伴大納言者本佐渡国百姓也。古事談曰伴大納言善男始佐渡国郡司之従者也付縁上京仕至大納言有罪被害ちう。伴善国より流されて死
ちう霊ハ疫病ハ神とちうるもうり。我云の外ろ犯
をれて。重き罪とかうつるふといへども。神わや去ハつく
し間。閻魔ハ我わうくうをうるうぱれさうて。今年天下
ふ疫病をありて。閻民落死ぐぱうはる紙。嗟病かりう
うるうり。ぱと其事とうしいきうちんとて。宮ハ立てる迦
海怖ぐうぐぱとうしくぱさけとあ。仮ハ伴大

納言は行疫流行、祈りて、身もうとく、法師ども、ぞろぞろとぞ、
ぬけたる。いたくいたくなんとぞ。

九　於朱雀院被取餌袋菓子語

今は昔。六条院の大殿信頼と申す人、方違へに朱雀院へ
拾芥抄曰朱雀院三條北朱雀西四町。四条北面坊城東　一夜、松ばらにけるに、石見守藤原
頼信。長敦子侍従　従五位下　長時、滝口にて、大殿の御ありさまを
見て、さればぞかし、朱雀院よりゆきて、侍べきようのこまひ
ぞ、いとめでたき。餌袋よ。菓子多く入れて、緋緒を
おもくぬきて、下紐よりゆきて。朱雀院ゆきて。
東対南面に、ひとりさぶらひて、大殿のいらせ給へと

待て。おもてをふせぎしばのさりて、弓胡籙を
おそく。餌袋をおもくかけ、うちふる。眠をぬぎて、絡よ
寝ぬ。ひとりぬるに、大殿おくして。頼信を、ぬぎ、ひ、絡
ひけばび。松ばら見ぬ。て。鈴をひらひて。弓胡籙を取
て。外の方へ出ぬ。ぬぎ。ものぬぎ大殿おもりて、法師ぬ
り。餌袋とひきぬ。て。取て。ぬぎ。開ぬ。ぬぎ。
菓子入れ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。
松ばらをぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。
を。ぬぎ。餌袋は。見ぬ。松ばらぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。
殿。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ。餌袋。ぬぎ。ぬぎ。殿。ぬぎ。ぬぎ。



まうてやがて夜ごとに枕元へ出て失ひ
ぬ但しおさんはかくて寝入り間もなんどの苦らひ
ろうまやといふ名れば皆人打それさわぎたくぶしを
相住がめうりと演てかくめうり作えうとも

十　近江國安義橋鬼敵人語

今いまは近江守まうし人の給ふ所にもの
あつまりて酒をぐ飲くぶおそびくるはたのめでよおりる人
とけるへば國乃安義橋　近江國蒲生郡在安吉郡其處之橋歟　いつかく
い人ゆさうぶいろれるまに公いひはくえうるわぶく
人ありと語ふ其中にかまくいさめる若うの者

えぞうの安義橋の事ハ前もきゝ給ふるあらぬ法師錦を
あるを。一座毛むくじに茶くしゃ。そもやとくりうあんこう
にいやなる法じといふ者あるて。角ぐいまあるそいろう。
守はるをゆめて。何事ぞいてぞや問るれば。ちうくろう
事ぞやとをれうと答へ。守益たるをとあるそくふ
男うかゝぐ馬をいくいやとさやまり。得さすぞと
いへば男ものぐるいてきをてまかさりいてく作く
ゝに。朋輩どもあつまりて。ぼくれよいしとをげま
せば。男ういとく。物をいてと事のうるをよいわゝぐ法
馬をほゝぐるゆうみれがかくいやちうといふ。早月

そうくゆうゝ。れそしくといふ。馬ぞ引出てわさ
うう男ハ馬乃尾ゝ油井わくあるて。股ゆ法くきあ
はく。義ゝにねさいれ。將衣束渡てゆゝて。馬ゝ乗て行ゆ
日もゝの湯ちくちうて。人氣もなく里ゝと行くきて
ろかくくゝいなぐゝ。物ハよゆさかりて。物乃ゝ行足
いてゝゝて物ゝ乗かゝゝて。ろくぐれや問る影か
らんゝ。鞍ハ乗ちうぐ。道行くゝれば。花井の要れ
彩色乃衣のをゝやうちうゝ。法ゝに紅の袴ゝを。物
のゝ横ゝうりて居ゝる鞍。ゆ。ゆくゝゝも物ゝ
ぐゝれ乗ゝ行ゝ行ゝ。家ゝ

若の者、まゆうれいと、ばけて、因幡ゑ
て、新五郎の女房をあざむくに、なるけをくいるて
まゐでぬくとひろをゑ、一わ、ぬ、人の捨くるをゑたぬぐて
ぬぐ、ゑたゑてゑぐ、いて、紙屑ゑく、身の毛ゑぐ、ちて、ゆて
ろ、けをば、馬紙ゑ、ゆくゆくと、出女あるゆ、ゆくゆくと、ふ
ぬ、地をひぐゑとげ、ゑ、ぬ、けゑ、ゑて、馬の尾と、面
ゆ、ぬ、ゑ、油をゑ、ゑれば、ゑ、ゑく、面ゑぐ、ゆ、ゑると
得ど、男馬ゑ、穀と、ゑ、くゑ、ゑれば、化物ゑ、けぐ、ゑて
ゑけゑる、男ゑ、ゑて、ゑれば、面の、ゑ、ゑ、ゑ、ゑく、ゑ、大さ
面、ゑ、ゑ、ぐゑ、ゑ、ゑ、

さて面をあらためて妻さい家人よりしらいてぱ
書紙ぐるりてれそれおりぱ家内の牧人出来
あるべぱ法陽所をよびくぱかいをろふ。竹日いれも
くはくちびべとりけるべ其日より成くぱ門を作ることあ
る物ちしけるぱ男ぐ同服の弟陸奥守よつさて。
毋紙具てくぐり居こふぐぱかてくまく門をたてく表
ろろふぱかこれ物ちなれぱ明日対面をんぱ其つ行い他家
よりくぱ宿くとくとくべ弟作ちとりる作日い
くれろ。某一人こをあくあぱ多くの去ぐる紙いぐをん。
日ぐあくれぱ今日ぐ諸来はるなるぱ母も

さあく失ぐるひすくぐぱ其ちまくもぐんぐくくりさんとひ
いれろ兄これよれぐろさてぱごろ母のる紙いぐ
かくくぱちいにこれを問べさ物ちにてさかをれ。
とくあをよくて入ろぱかくて庶の方をを物くいをて
はぱぐひよ向居く法ろれむ妻い麗の内よ居く
関行くぱかるまくとろいくんぱ兄を弟引くて上
よちり下にたるぱろくくくくろびろ妻こいいふ
くをいてぱ兄よにちりてぱ祝ちるおり紙つる庭
といてぱ妻物ちくぱかこはさてあぐとこ云
て夜をくこ。

[illegible]ものさい
[illegible]て足を[illegible]
[illegible]
ゆくとて妻ぐ方をとりてそう[illegible]
[illegible]ぬぎ物ぐらりけ鬼の[illegible]
[illegible]
[illegible]

十一 東国人値鬼語

[illegible]東国よりのぼりとる人。勢田橋を渡り
[illegible]人の家をとりてやどりぬ
[illegible]人も値ぬ。大なる家のうつるより下

[illegible]宿と後者いとかりあり。馬のつかぎ
て居りぬ。いとなりあり。[illegible]
[illegible]
[illegible]
鬼などの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

馬紙絵くらべ

ゆよりこんうの夜あれば、うの袖へ
乃わたぐも、大きさ、あ、いくさうれくれそ色
ぎちりかくあ、ぐ。芋田橋よりかうて、逃げべき
よも出ぐえんげりしうば。馬よりわうてう紙ば捨て橋
の下れ西の柱乃ようふうくしてうぐ。ゆう岳ように鬼
ありて橋乃上にてぞうさ。ゆでき。芋をあげく。何
傍くと。ぐ。よびれば。橋の下より。作とうえて
出る。あり。ぐも。紙ば何者も。ぐ。橋のとろ乃
鬼ぐいたく。袴の男紙。是まで逃ぐ。あり。ぐ。あ
うの。橋さ。ようよ。橋の下ちう鬼。ぐうう。ぐと

うし。家に。取ぐ。ぐ。ぐうの男とぐうみ。ぐ。
さ。ぐ。ぐ。ぐう。男ぐ。家人。紙。紙ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
男紙。ぐ。ぐ。紙。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

十三　産婦行南山科値鬼逃語

といむ。あ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

[illegible]を[illegible]ん[illegible]るみ。ゆゑの[illegible]そいつこゝろ。山
荘乃やうにつくりさのおのくゆゑれ掛ごろ座の。
人とあわ待をれば宮うて舟ひとうい出ちをと
ちいく垣と越く入わ。打おくる板敷よのぐり居て
やともよ。奥の方より白髪の老婆まうて何人をれば
わひうきぐ。ゆくしうぢといくべ女房ぬまうたなく
くかうゝ。姫いとわくしたる事うれ宮うて舟へと
ついく門みよじいをべ女よんろごいて仏のあとけり
とゝいて入てうふ琴あごちうてとうせうゝ。行かく男子
を舟へ。わ姫まく我い年れ。むくゝる田舎よ行る舟

をれい物ゝ。ゆくゝ。七日ばゝうゝかくて行くゝまをとば
女房よ湯ちどわりさを。浴さをれば女う行くゝちして。
をそんとゝいゝ。ゆて。捨ごゝてとぐそうゝかくて三日
わごゝ。ゆく女ひをを紙ごうをく。晝寝ゝける紙姫ちごく
ゝ。穴其氣をで一口くいゝをぱのゝ。ゆ向て。抱い
鬼ゆ古を。行をくうしよくいろうをべゝ。ひをうま
ゝく迎んとゝいて。姫ゝ晝寝ゝ。ある間よ。子紙い女
房へ頁をてばゝ。ゆ。ゝ道よ出ゝく。行をく栗田口
ゝいゝう。ゝ行けゝ法。ゝ。行て。嬢の小家ゝ立入。
ゝくゝ。ゝ。ゝ。

ぞ。ゆかしく思ひ給へ。さてはいかなる人にか。
とのたまへば。ものいはせ給へ。女房まゐりて侍
りけるとぞ。

十三　平季武値姑獲鳥語

今は昔。源頼光朝臣。武徳守にて。内裏に宿直する時。其館に
あまたの郎等どもあつまり居たりけるに。この物語しける
あひだ。ある者のいひけるは。四月の頃とぞ。姑獲鳥の。
産の日にて。家にとぢこもりて。姑獲鳥子産なりとて。
こもりをりたりけるに。あやしきものの。ものいひけれども。
あけなどせざりけるに。ものいひけるは。
をのれは。いづくにぞ。今宵のつとめ。
をのれは。

頼光四天王一人家号赤考俗曰ト部者

平季武

姿作

こもりを開てゆきとぶらはんとて。
人々傍輩どもいとくゆかしがりて。
の者ども一人うちをあてをせ。射ものいたるべし。
とぞいひける。季武いかでかは。
こいやとてこもりをいたりけるほどに。
やがてとくあけてひろげ。
其後ものいはせ給へ。
我く鎧冑弓矢駿馬を。
まうきんとのたまへば。季武いかでかは。
つくるべきぞ。我

方より海りきんと紙して後。春武ごいくぶ。ぶくこと紙
着くれもちろにい初家の。ざ。ぬ第一番紙。川向の
土よ。ちくくるべ。ぬ初紙行て見てゐて。馬よ。ゐて
すみ行ろ。ぬ。ぬ。ぬ

河のそばにいくつかの女ぐるまいでたり。風ふきて車
の簾ひきあげたれば。是をみれば。嬰兒乃母
にてありけり。季武いでゝ見て得たりとて
袖乃上をとらへてゆかんとす。ちゝくあまこの女逃つゝく。
其ときに季武ゆきて女をとらへ。河より西の岸よりはなれ。ちゝくとうちあか
りさいなむ。其時に三人の者。姑の方に向て。
申さるゝ。ちゝくは。ちゝくはとうちあらしてゆるし給
へとなり。季武館に帰つきぬれば。是をもあたつ
いそうとうぬ。こゝに季武馬より下り門に入ぬ。おもひ

者ども。はしりくゞりぬ。ぬれいとゝ紙しけるにゆるしく。姑
獲鳥乃子をうしなひてなげくぞ。あまこの女をとらへ
をひきくるしめ。本の所おしへ方をもとめ向
けるこの人は者ども。はつれ方をうしなひぬ。
はゝぐも。ちゝくうつて打たれ。絹束のかきねと成
して。季武見てとけまゝ。季武をしばしていろは。
かゝぐわしくいろはつよくいつるぐるまなり。
くゞりは筆をもつくるものやあるぞ。ちゝる紙鳴呼の
はゝくとんいかゝとゆげかとして。皆入りけるこれを女
人皆季武とゆあにくゝとちりん語たゝえるとなり

西　正親丸美為思被殺妻語

今いむかし。正親丸美といつる者あり。若りしとき。ある所の
あだびと人の妻とあり。通ひ来る。あるとき。女が伴ひゆきて。
あるべきといひたれば。女がいはく。我家は田舍人多く
来りて。やどりめぐびぬ。まことまことあるべき所にあらず。思ひ寄る西
の方に。人もなき堂あり。そこに秋よれわれまをして。新奥
して。西の方一町餘隔よ。件の堂にいとうぬ。女堂の戸
をひきあけ。我家より。一度二度。義をして。明
くる夜来ぬ。そこの堂の後の方より。火の光
見えて。そこに人あるにて。井の上に女童。燈火

とおもふ。ほのかに。伴の法師。あるよりてこそ。
房来りて。ものいひ。ものいひ。寄怪なる
事あり。我いはく。ものいひ。ものいひ。
そこ。ものいひ。ものいひ。
そこ。ものいひ。ものいひ。
ものいひ。ものいひ。
ものいひ。ものいひ。

女房ハ家ようしたゞけ
ぐらゝ花わかいい翌日の夕方まで打臥居るゝ。後
若女房のわせまはしたるのつゞけもバ女ゞやゞらし
ゆう女ゞうゝふりて関いちの人い帰るゝあいろゝより。
ものゝ世ゞくゞ。おゝゝゝあゝにゝんゝゝとゝゝゝる事れ有
けゝゞゞゝ人間ゝ化ゞゞ。えのゝゝあいゞゞしゝゞゞゝまれゞ
ろゝさけゝゞゞ。俵屋とけゝくゝゝ出ゝれゝゝた行ゝゝか
くゝゝまゝいゝゝゝいゝゝ紙ゝゝて。西紀ゝまゝゝゝゝたい夜
若ゝゝくゝのゝゝゝゝゝゝゝ。鬼のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝとゝゝゝゝゝゝ口惜さゝゝゝ涙ゝゝ。西紀ゝ年老て人

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よしわるき宿とぞ思ひたりつるに
火の光ばかりにまてまゐりぬるに
まさる所なんぢ庵のまを行をくうつるべしぬるまをば
門ぢかくる人くちをうさぐらかぬいとじ給はんとしに男
うちうちさやうにもけまべしもめくもしらるやうにて宿を
かりまくとまどれば女さらばいかくてはせ我見
の年ごろ相見ざりしぐるまわそびてぬ乳ふみあぐく
て来るちりといつべしぬるのうとを得るあ人来り婦
ましいていぬるやうにれ老あるとかのうあひろこいく男
いつでうくしらべきぬ行ぐうれくこれとしらく

ぬ女男とびのくに間なりぬ遠と敷てうるせてしば
男そこに居るふ女家てひそうふいつまうはこい我
ぬ京のうこて住りし人のひもちりぬいうをびあまきさ
物よとうれて毒ちりて年ごろうて行ちりぬたた
まうちりをぬれとれてさめぐと泣ぬ男これ
とうてぬれるこのやんとれそるくこい居るふ。
我家くこのうふ来りてうれくこのわぬ女出くこ
とひきて内よ入来るれぬいうくこ大なる白粉
ちりぬ粉男ぬくうしをば女これい年ごろ来と
ちひつるえぬよ内して寝りれとてうといふ。

物こしを流布して、竜乃口より所々とび、女は真っそべ
て、芋とにぎりぶくて合物さしげみてあて
ゝれば、男ゝくらいて寝ぬ。彼仏く後、女合物持来て
男にいとく、家よりあるとゝ人よかゝり給ふ。みはくに
あるりにわがきゝこれいとゝ寄ゝといへば、男あゝ多
人よりはじめて、ゝなぐひて、ゝにうさきのふちゝく
りあへ行くゝ。ほ事をありしと、妻人ぎゝ多
ゝれば、閑人奥でて、みゝよりかゝりつぶる。紙ちゝぐる
出いなゝぶやふゝよ行て、物紙射ゝゝて、妻紙とゝん
といゝの者ゝば、事とぬしの来、我いゝ所ゝに二

百餘人あつまりて、伴の男紙、室内ゝゝて、ゝ名社と
持ゝ行ゝゝ。男ぐ行ゝゆゝふちゝぐいて、長ふよいさりて
ゝれば、ぶき庵あゝ。男ゝこの庵ちゝといゝ紙物きて多
行ぐゝつき出ゝゝぶ男ぐ新とゝんゝまゝ庵よゆて、女と
あゝよゝて、この奥ふ行ゝゝぶ紙、四方より雨のふゝぶく
ふ射ゝれども、一箭もあゝゝぶしゝぶ近ゝゝて打新
ゝて、追けもべ物も女ゝ鳥の毛ぐぶゝゝて、ふ
ゝ人ゝゝぶものゝいゝて、ゝぐ来よあゝびゝいて帰る
ゝゝ。安穏ゝゝ男ゝ家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて、ゝ百ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

うの物い祈ちどうさやうもんぱ物迄に関こおり
めをいつ人もまりてゆめうはけんうるとなり

今昔物語十三